＜論文＞

「ハーフ」のドラマトゥルギーのために

――ソーシャルメディア，「労働」，ジェンダー秩序――

ケイン　樹里安

［要旨］

現代日本社会において，時に問題状況に直面するハーフと呼ばれる人々の日常をいかに分析することができるだろうか．本稿は，上記の問いに答えるべく，ゴフマンのドラマトゥルギー理論の援用を試みながら，ソーシャルメディアを介することで，対面・非対面の状況で構成されるハーフの日常を具体的に描くための理論的・方法論的立場を探究することが目的である．そのために，ソーシャルメディアを介したあらゆる実践は「労働」であるという批判的視点をもつこと，そして，そのさなかで生起するジェンダー秩序を描くこと，という2つの問題提起を行う．

キーワード：「ハーフ」，ドラマトゥルギー，ソーシャルメディア，「労働」，ジェンダー秩序

0　問題の背景

日本社会において，父母のどちらか一方が外国人である者のことを「ハーフ」[1]と呼ぶようになり，半世紀が経過しようとしている．そして，「容姿端麗な欧米白人系」を軸とする支配的なメディア表象はますます遍在化しているように思われる．一方で，あたかも舞台役者であるかのように，特定の振る舞いを強制されつつ，それに抗しているように思われる「ハーフ」の問題含みの日常は，十全に可視化されているとは言い難い．本稿は，E. ゴフマンのドラマトゥルギー理論を手がかりに，「ハーフ」と呼ばれる人々の日常を記述し，分析するための理論的・方法論的立場を探究することを目的とする．

1　先行研究の整理

「ハーフ」と名乗り，名指される人々についての先行研究は，支配的なメディア表象や言説編成の変遷を追尾することで，彼ら・彼女らを取り巻く戦後日本社会における諸力を明らかにする試みが中心だといえる．容姿端麗な欧米白人系といった

身体的形質やバイリンガルといった言語能力をめぐる，1970年代に構築された「ヘゲモニックなハーフ性」の批判的検討（高 2014），言説編成の経年的推移の追尾（田口 2017），「黒人性」や「男性性」を強調する，かつての「混血児」表象を介した他者化の力学の現在性（山本 2014），朝鮮半島にルーツをもつ「ダブル」の人々をめぐる無徴化の力学などが明らかにされつつある（川端 2014）．これらの先行研究は，時代状況や人種化の力学の変遷を明らかにすることで，「ハーフ」といった呼称でカテゴリー化されてきた人々を取り巻く社会的文脈という舞台装置（Setting）の一端を可視化する作業だったといえる．

ところで，先行研究において，しばしばソーシャルメディアやインターネットが社会的な舞台装置に肯定的な転換をもたらすものとして言及されてきた．「人種差別や他者化の構造」を可視化する草の根のメディア・アクティビズム（田口 2017: 223），「カテゴリー化に違和感を表明し，その打破を目指し」た活動の場（岩淵 2014: 23），「権利主張のための社会運動や問題に対する異議申し立てというよりも，ミックス・アイデンティティーを表現する手段や個々人の経験を緩やかなコミュニティとして共有する『居場所探し』」の場といったものを成立させる技術的要件として（堀口・井本 2014: 71），それらは描かれている．上記の議論は総じて，「ハーフ」と呼ばれる人々がメディアを介して「経験の共有」や「アイデンティティの模索」を行うことで（藤田 2012），彼ら・彼女らが直面する問題状況に肯定的な転換が促される可能性に着目したものといえる．そうした「ハーフ」たちのコミュニティは2008年の段階で100を超えており（Evanoff 2010），ソーシャルメディアの横断的利用の興隆に伴い，現在のコミュニティの総数および参加人数の正確な把握は困難である．

ところで，ソーシャルメディアを介した対面的・非対面的な「ハーフ」たちのコミュニティに注目が集まる一方で，具体的な様態にアプローチする研究は圧倒的に少ない．しかし，その蓄積は急務である．なぜなら，研究者が現に生起している問題状況と対置させるかたちで，「ハーフ」コミュニティをあくまでも「肯定的なもの」としてのみ描き出すばかりでは，その内部においても働く社会的諸力の影響関係を捨象したままに，バイアスのかかった形で称揚するにとどまる可能性があるためである．何らかの問題状況が生じていた場合，研究者のバイアスによってそれが隠蔽され，結果として問題状況を克服する創造的な契機を看過することにもつながりかねない．

加えて，ソーシャルメディアの利用を企業複合体による「搾取」の契機として批判する議論が提出されていることも看過されるべきではない．J. クレーリーが喝破したように，ソーシャルメディアの利用とは，本来，労働時間外であるはずの余暇時間を収奪し，多数のメディア・コンテンツの生産と利用履歴の提供に勤しむよう人々を水路づけ，それらを元に，その他大勢の利用者の快楽や快適さを創出させることで，企業複合体の利潤の追求に貢献させる無償の「労働」（labor）にほかなら

ない．創造的かつ能動的なユーザーという名の「勤勉な労働者」としての「労働」へと水路づけられた人々を前に，ソーシャルメディアの台頭を社会変革かのように無邪気に言祝ぐ技術決定論者はもちろん，メディアを「中立的な一連の道具」とみなす研究者も，企業複合体の利潤の追求および疎外状況の維持・正当化に加担する者として批判されるべきである（Crary 2013=2015）．「ハーフ」のソーシャルメディア利用に着目する研究も，クレーリーによる批判を免れることはできないだろう．

とはいえ，研究者として，「ハーフ」のソーシャルメディアを介した実践を搾取的な構造に基づく「労働」として捉える必要があるにしても，まずは経験的な水準からその機制を明らかにする必要があるだろう．大規模なコミュニティの管理人であるエドワード須本がコミュニティ形成におけるコンフリクトを指摘していたことをかんがみれば（須本 2010），現代日本社会における「ハーフ」のソーシャルメディアを介した「労働」と呼びうるかもしれない諸実践を「肯定的なもの」として描写するにとどまらず，問題状況を含めた具体的様態にこそアプローチせねばなるまい．

ここで注目されるべきは，肯定的な転換をもたらすとされてきたソーシャルメディアを介した相互交流の具体的な様態を，「話法」とそこに潜む排除の機制から描き出した議論である（ケイン 2017）．ケイン樹里安によれば，彼が調査対象とした「ハーフ」コミュニティにおいては，「ハーフ」ならばいかにも直面しそうな問題状況や葛藤をおもしろおかしい「ネタ」としてパッケージ化した上で披露し合い，お互いに笑い飛ばすような話法――「ハーフあるある」――が連鎖することで，ソーシャルメディアを介した相互交流の場は社交空間ないしは居場所として立ち現れていたという．ケインによれば，話法とは，問題状況を「しのげるもの」に転化させるマイノリティとしての「技芸」であるという．だが，その技芸こそが，出会いの場からの成員の排除をも生み出すという．話法を駆使できない「ハーフ」は「ネクラ」といったラベリングがほどこされ，相互交流の場に呼ばれなくなり，関係性が切断されてしまうのだ．つまり，居場所としての「ハーフ」コミュニティには「問題状況をしのぐための技芸を駆使できるか否か」という規範があり，それに抵触した者は排除されてしまうのだという（ケイン 2017）．

本稿にとって重要な点は，ソーシャルメディアを介した「ハーフ」コミュニティには成員資格を規定する規範があること，その規範に適合的な振る舞いを「ハーフ」たちが行っていること，そして，それらは日常の問題状況と密接な関わりをもつことである．ケインが明らかにしたことは，「ハーフ」コミュニティの境界づけに話法が活用されていることだが，より多様な視点から居場所の境界づけをめぐる実践や成員資格のありようを明らかにすれば，問題状況を切り抜ける「ハーフ」の日常を描くための示唆を得られるはずだ．そこで，本稿は「ハーフ」コミュニティを成立させる機制をより多様な視点から描き出し，次に，その機制を「労働」と捉え返

すことで，現代日本社会における「ハーフ」の日常を描き出すための理論的・方法論的示唆を得ることを目指す.

2　分析視角としての「膜」

本稿では，ある特定の相互作用場面において人々が織り成す一連の振る舞いを舞台上に立つ役者とその秩序になぞらえて分析するE. ゴフマンのドラマトゥルギー理論を分析視角とする．もっとも，本稿の目的もゴフマンの目的も「日常生活に忍び込んでいる劇場的諸側面ではない」．つまり，人々の作為性を暴露することではなく，あくまでも「関心事は，社会的出会いの構造――人びとが互いに直接肉体をもった者として人前に出たときに存在し始めるようなさまざまな事象の構造――である」（Goffman 1959=1974: 300）．「肉体」という表現からもわかるように，ゴフマンは対面的な相互作用場面を想定していた．だが，D. ボイドがゴフマンを引用しつつ対面的状況と同様に，ソーシャルメディアを介して取り結ばれた関係性においても「礼儀作法や行動規範」（Boyd 2014=2014: 80）はあり，その利用形態は「人種を基盤とする力学」（Boyd 2014=2014: 271）と無関係ではないと論じていることから示唆されるように，ゴフマンのドラマトゥルギー理論は，オンラインとオフラインの相互作用場面を横断する「ハーフ」の実践を捉えるために有効な視角を提供すると思われる.

本稿が特に注目するのは，ゴフマンの「膜」（membrane）という概念である．ゴフマンは「どのような社会的出会い，すなわち，どのような焦点の定まった集まりでも，第一にはその出会いを包む『膜』の機能という文脈で理解すべきである」（Goffman 1961=1985: 79）と述べている．まず，彼のいう出会いとは会話やゲームをはじめとする「人びとが，互いに相手と身体的に直接的に居合わせる場合に起きるあるタイプの社会的配置」（Goffman 1961=1985: 4）のことである．一方，「膜」とは，人々が会話やゲームに没頭するために，外部世界と出会いの場を「遮断」する働きをもった「境界」ないしは「バリケード」のようなものだともされる（Goffman 1961=1985: 14）．遮断されるものとは，たとえば，「参加者自体の特性のあるもの」（Goffman 1961=1985: 66），すなわち性別，ジェンダー，年齢，社会経済的地位，身体的に顕現した形質，精神的な状態，宗教，そして何より「人種的または民族的種類の社会的スティグマ」（Goffman 1961=1985: 40）だとされる.

だが，堅牢な「壁」ではなく「膜」というメタファーが用いられており，「篩」（Goffman 1961=1985: 20）とも言い換えられているように，人々は，特定の属性や事柄を関心の対象外として「膜」の外部に放擲するのみならず，それらに何かしら変形や修正をほどこした状態で，「膜」の内部に絶えず持ち込むこともあるとい

う．それゆえに「『膜』は多くの脅威にさらされやすい」(Goffman1961=1985: 62) 脆さを抱えたものだというのだ.

彼が『Frame Analysis』において，状況を組織立てる解釈枠組みであるフレームについて論じる際に，支配的な解釈枠組みは相互作用のなかで絶えず「転調」（keying）され，意味合いが変転されるものとして論じているのと同様に（Goffman 1974），特定の状況の定義が維持されるはずの「膜」の内部も，意味が変転されゆく可能性が示唆されているのだ.

「膜」の内部は，どこか遮断された閉域として感受されるからこそ，人々は自発的関与によって居心地の良さである「ユーフォリア」(Goffman1961=1985: 63)を創造的に生成させようと努める．だが，「膜」が脆いからこそ，人々は参加者の特性を持ち込まないよう試み，また，「共通するもの」をもった「対等にあるものだけが社交的な集まりに招かれるというルール」 (Goffman1961=1985: 77)などを適用することで，当惑や不安や「気づまり」によって生じる居心地の悪さである「ディスフォリア」(Goffman 1961=1985: 63)を軽減させようとも努めるのだという.

本稿にとって，ゴフマンの「膜」という概念が重要であるのは，それが，出会いの場における成員資格や人々の振る舞いをある程度規定しつつ，組織立てるような働きをもつものとして設定されているためである．つまり，理論的仮説としては，コミュニティの境界と成員資格という「膜」に関連する人々の語りや実践に照準すれば，その場を組織立たせている機制が明らかになる可能性があるということだ.

そこで以下では，まず，ゴフマンの「膜」という分析視角から，グループZという「ハーフ」コミュニティにおける事例を取り上げ，コミュニティを組織立たせる機制とそこで働く社会的諸力の分析を試みる．そして，当該のコミュニティにおける実践を「労働」として捉え返した上で，今後，「ハーフ」の日常のドラマトゥルギーを分析するための方途について記述したい.

3　事例としてのグループZ

本稿は「ハーフ」コミュニティを成立させる機制をより多様な視点から描き出すことを目的としており，まずもってその機制をゴフマンの「膜」という分析視角から描き出す．次に，クレーリーによる「労働」という視角から「膜」をめぐる人々の実践を捉え返すことで，「ハーフ」と社会との関係性を浮かび上がらせることを目指す．本稿の試みにおいて示唆的な事例として，グループZにおける人々の実践に注目したい.

グループZは以前から関西に存在するFacebookを介した複数の大型「ハーフ」コミュニティから枝分かれするかたちで2015年8月に新たに立ち上げられたグループで

ある．調査協力者のうち，グループZの管理人および中心的なメンバーとは，調査者が2012年12月から2013年11月末までの約1年間にわたって行った調査においてすでに出会っており，そのためにグループZへのアクセスが可能となった．

実は，調査者は2017年4月18日までグループZの存在を知らなかった．2012年から2013年にかけての集中的な参与観察からFacebook上で調査協力者と「つながりっぱなしの日常」を続けていたとはいえ，イベント自体には数えるほどしか顔を出すことができず，加えて，大型コミュニティの1つが「開店休業」状態に入ったこともあり，知るきっかけをもたなかったのである．調査者は，調査者が執筆した論文を以前からの調査協力者であるZ1（女性30代前半）さんに読んで頂いたことでその存在を知り，また，同じく調査協力者であった20代の男性メンバーに大型コミュニティで知り合ったメンバーと「めっちゃ久々に飲むんだけど来ないかい？」とFacebookのメッセンジャー機能でイベントに誘われたことで，グループZにアクセスすることが可能となった（2017年6月15日，フィールドノートより）．

さて，分析の基礎となるデータは，2017年6月16日に開催されたグループZのイベントの参与観察で得られたものである．具体的な調査協力者としては，グループZの管理人であるZ1さんに加え，中心的なメンバーであるZ2（20代後半女性）さん，そしてZ2さんの彼氏でありイベント当日に初めてグループZに参加した20代後半の「日本人」男性，Z3さんの3名である．以下では，グループZの管理人Z1さんの語りを中心に分析する．イベント当日の状況は次節で述べる．

後ほど確認するように，グループZは新たな「ユーフォリア」を求めて立ち上げられたコミュニティである．それゆえに，「ハーフ」コミュニティを組織立てる諸ルールおよび「膜」の具体的な様態，営まれる「労働」のありかた，そして「膜」と「労働」を通して垣間見える現代社会のありようを明らかにしうる，本稿で取り上げるにふさわしい事例だと考えられる．加えて，調査結果で検討するように，調査者が成員として迎えられる場面，（こちらは事後的に判明したが）「ハーフ」ではない「日本人」が成員として迎えられる場面，そしてルールが開示される場面といった，「膜」に関わる重要な諸場面に立ち会えた事例であるからこと も，調査対象としての適切性を満たしているように思われる．加えて，クレーリーと同じく，ソーシャルメディアを介した実践を「労働」とその搾取として捉えるカルチュラル・スタディーズ，特にニュー・メディア・スタディーズの研究動向において，経験的な水準からその様態を把握すべくエスノグラフィー調査を行うことが推奨されていることからも（大山 2015），参与観察によって「ハーフ」コミュニティの具体的様態に迫る本稿の試みと方法論は合致していると思われる．

ところで，本稿の執筆者は「ハーフ」と呼ばれる1人であるために，本稿は当事者（native）による研究とみなされると思われる．しかしながら，本稿では必ずしも当事者研究という立場を採用しているわけではない．2012年の調査開始時点までソ

ーシャルメディアないしはインターネットを介したコミュニティに参加したことがなく，なにより，ルーツやルートをはじめとしてあらゆる社会的属性が多様である人々が便宜的に「ハーフ」とカテゴライズされている現状をふまえれば，調査者がいわゆる「アメリカ・ハーフ」の20代後半の男性であることをもって「私は当事者である」とする立場を素朴に採用することに逡巡を覚えるからだ．調査者としては，三浦耕吉郎の議論に依拠しつつ，山北輝裕が主張する，研究者が当事者として位置取りをしようとしまいと，いかなる調査法を用いようとも，あらゆる社会調査は，調査者とフィールドの他者，フィールド内での調査者とフィールド外における調査者との「関係性の間隙」に自覚的になりながら行われるべきだとの立場を採用したい（山北 2011）．とはいえ，「ハーフ」であり，「欧米白人系」という「ヘゲモニックなハーフ性」の一部を抱えている調査者であるからこそ，グループZに限らず，さまざまな「ハーフ」コミュニティにおいて，ある程度の成員資格をもった存在としてフィールドに入れたことは確かである．そして，調査結果および考察において明らかになるように「関係性の間隙」がふとした瞬間に露呈し，自覚したつもりであった自らの立場性が揺らぐ機会が生じている．本稿では，この揺らぎを含めて，「ハーフ」コミュニティを秩序づける機制に迫りたい．

4　事例の検討――グループZにおける実践

以下では，フィールドノートを再構成したデータに基づいて記述する．

4.1　イベントの一次会

グループZのイベントの一次会は，大阪市内の個室居酒屋で予定通り2017年6月16日の19時から開催された．参加者は12名（男性5名，女性7名）だったが，あとからZ2さんの彼氏であるZ3さんが加わり，13名となった．管見の限り，今までの大型コミュニティのイベントでは，原則として「『ハーフ』であること」が成員資格であったため，非常に驚く．調査者を除いて全員が「就職組」であり，構成としては「今日アメリカ多いわー，孤独」と参加者に言われる．たしかに12名中4名が「アメリカ・ハーフ」なのは多い方ではある．ひとしきりワイワイと喋ったあとで，Z1さんが「はじめましての人もいるよね？ほんなら順番に自己紹介しよか」と仕切り，参加者は相互に各々のルーツやルートを開示していく．Z3さんは「えーっと僕は『日本人』です」と述べ，笑いを誘っていた．調査者の順番が来た際に「この子，うちのインテリ」とZ1さんに紹介される．

4.2　イベントの二次会

4.2.1　「ハーフコロニー！」

2時間ほど経過したのち，近くのバーへ移動．店の奥ではライヴが行われており，盛り上がっている．それなりに大きな声を出さなければお互いの声が聞き取れない状況だ．なんとか全員分の席を確保し，各々がお酒を買いにいく．席に座ってほかのメンバーと喋っているときにZ1さんが隣に着席．Z1さんの「ハーフコロニー！」という即興の呼びかけに全員で「イエーイ！」と応える．

「こんな飲んだくれの会になりましたよ．でも，もう書いてるあれ［調査者の論文：引用者注］やったら関係ないけど，もうハーフ会とかまったく関係なくなってて．そっから出会って．みんな結構ねぇ兄弟みたいに近なったよねぇ」とZ2さんに話を振りつつ「このハーフ会が，なにかあれば相談するみたいな会になってぇ」と説明してくれた．

4.2.2　「もう越えたかなぁ」

30分ほど経過した段階で，テーブルにZ1さん，Z2さん，そしてZ3さんと調査者がいる状況になる．Z1さんはZ2さんの彼氏であるZ3と調査者に伝えるためか，グループZがどのような会なのかについて詳細に語ってくれる．

Z1：こうやってハーフに限らず自分にとって大事な人とか大丈夫な友達やったら連れてこれるような会にしたくって．だからグループZやったら，飲む！飲むってあれがあるから．だからうちらの友達とか彼氏とかやったら，理解してくれてるっていうのが前提．みんなに聞きまわって「どっから来たんですかって？」て聞かんような理解してくれてる人っていう前提．前提で，そーゆーみんなを含めた会が作りたくって．彼氏さんとか彼女さんとか友達とか呼べるような会にしたくって．前まではダメやったのよ．

**：そうですよね

Z1：ハーフ以外にもさ，厳しいよね，だって在日朝鮮人はダメとかぁ

Z2：そっちのほうが排他的やんかぁ

Z1：そんなんしてどうすんのって．自分の居場所がなくなるだけやん．在日朝鮮人でも，日本人でもいいやんって．そのハーフていうのが今後普通になるよっていうことに理解を示してくれてる人やったら，誰でも呼んでいいんちゃうってのがあって，そーゆーのがやりたかったってのが，まぁ流れで．小ぢんまりした会からはじめて紹介できる人同士を呼んでもらうって

いうか，ほら，Z2の彼氏さんとか，わたしの夫とか．で，もちろんフィアンセ呼んでくれてもいいし（笑）

（調査者に目くばせ）

Z2：ほんまや今度呼んできてよ

**：今度呼んできます（笑）

（中略）

Z1：で，徐々におっきなコミュニティにして．なんかもう，ハーフって普通．ハーフって普通におるってのが当たり前．珍しくもなんもない．今後日本人とも結婚していくやろうし，普通になっていく．文化もいっぱいできてくるやろうから，そーゆーかたちの会にしていきたいなって思ってる．この，酔っ払い会から（笑）

**：酔っ払い会から（笑）

（中略）

Z1：で，前の排他的なんはイヤやった．で，私の夫は今のグループとは逆に前のは排他的やったの知ってたから行くのをいやがってた

**：あー

Z1：ハーフオンリーって．で，実際に私は来てもらいたくって．来てもらってよかったのが，たしかに男女両方おるから，出会い系みたいなとこやったらどうしようみたいな不安もあったみたい．でも，実際に来てもらったらわかるけど，あいつら恋愛のタイプちゃうし，魅力ないしー．ごめんねでもそーゆーね

**：なくてすいませんねぇ（笑）

Z3：いや，あるよ！（笑）

Z1：いや，いやごめんごめん，言い方間違えた，あるんやと思うけど

**・Z3：思うけどって（笑）

（一同笑い）

Z1：あ，いや，ごめんごめん傷つけるつもりはなかった，ごめん（笑）うん，まぁギリギリかっこいいとは思うわ

**：ギリギリって（笑）

Z1：照れくさいだけー（笑）でも，じゃなくて，そんなんで集まってないし，変な空気ならないから．そんなんじゃないし．そーゆーグループじゃない

から．で，逆に，私と旦那さんのことで変に嫉妬するとかそんなんもないし，隠れてモゾモゾみたいなのもないし，いい兄弟みたいなもんかなぁ．もう長いからね．だからほら，彼女の見回りで来てるのもあるやろうけど，もう大丈夫やろ？（笑）

（Z3に目配せ）

Z3：いやいや（笑）もうめっちゃ心配！

**：愛やわぁー（笑）

Z3：来て余計思ったわ（笑）

Z1：男前やけど意外とネクラみたいなやつ多いから（笑）

（一同笑い）

Z1：だからまぁ，いい証拠か，こんなかでカップルできたことないし．だから，今日もこうやって彼氏連れてきてくれて本当にうれしいねん．どんどんグローバルになってくるでぇ，このグループは

Z2：グローバル？

Z1：ほら，今日こうやって彼氏連れてきてくれてるし．ハーフやから，外国人やから，日本人やからってわけてしまうんじゃなくて

Z2：あぁ，じゃあ今度は自分たちの子供連れてくるみたいなんねー

Z1：ほんまやん，それいいなぁ．そうそう，だから，ジュリアンが論文で書いてくれた頃とはもう変わってて，今はもうこんな感じで『ハーフあるある』をわざわざするっていうのは，もう越えたかなぁ．もう今さらっていうか，そーゆーの越えて集まってるって感じ．こうやって，ジュリアンもそうやけど，気い合う子ばっかり集めてるし

上記のようにZ1さんは，「ハーフオンリー」という従来の「ハーフ」コミュニティにみられたルールを取りやめ，より開放的な性格をもつコミュニティとしてグループZを立ち上げたと語ってくれた．実は，Z1さんは5年前，2013年4月23日に実施したインタビューにおいて，調査者に「私の彼氏，We are the Worldみたいな人やねん」「『ハーフ』やからって，それだけで集まるのも違うくないか？って言われるねんなぁ．やから，彼氏も連れてきたいねん．そういうグループやったらなぁとは思ってる」と語っており，現在のグループZは理想を実現した形になっている．加えて，グループZの立ち上げに伴い，自分の問題状況をあえて笑えるネタとして語る話法によって共同性を構築していた状況は「もう越えた」と語っているのである．

4.2.3 「ハーフ」の「女子」であること

Z1さんはグループZの成員資格についての語りから続いて，グループZおよび同時並行的に取り組んできた「女子会」を立ち上げる経緯について語ってくれた．

Z1：でもほらやっぱ，一歩外出たら可愛い子らやんか？だから行くお店が，予約もせずに，たとえばHUBとかに来ちゃうと，落ち着いて食べられへんかったりするし，喫煙者も多いし，ほんでー，女の子ばっかりおるとすぐナンパされてーみたいな．そーゆーのやっぱ女子はすごいイヤがったというか．じゃあ私は女子会しよっかなぁーと思って[2)]

**：ナンパか…….なるほど．それで，どっかのタイミングで，やっぱいままでのハーフ会とは違うものをつくったほうがいいって思ったってことですか？今までのイベントやと，タバコの煙も気になるし，落ち着いて食べられへんし，ほんで，ナンパもされるし，みたいな

Z1：そうそう．なんか私も無駄に姉御肌やから，あのー，やっぱ気になるんよね．ほら，あっこに座ってる〇〇とか，変なちょっかいの出され方されたとか，ほかにもイヤな声のかけかたされた子おったよーとか聞いてて

**：そうやったんですね

Z1さんはグループZおよび女子会を立ち上げた理由の1つとして「ナンパ」を指摘した．たしかに「ハーフ」コミュニティのイベントだとしても，場所が場所であれば（あるいは，どの場所であっても？），多くの「日本人」や「外国人」，さらに潜在的には「ハーフ」コミュニティの成員によっても，いつナンパが開始されてしまうかは未知数である．今回のイベントの一次会が個室居酒屋であったことも，おそらくこの点を考慮してのことであろう．調査者が思わず「ナンパか」とつぶやいているのは，20代男性として「ハーフ」コミュニティに参与するなかで，女性の「ハーフ」が常にその可能性に取り巻かれていたことに，思い至っていなかったためである．実際に，先行研究で指摘されていたように，恋愛禁止をうたっていた大型コミュニティのなかで「結婚を考えている」パートナーと出会った参加者の語りや「出会い系みたいな投稿ばっかりアップするのやめてほしい」「そんなんじゃないのに」といった管理人の言葉はその可能性の潜在的な高さを物語っているといえる（ケイン 2017: 173）．さらに，当該の研究において女性参加者へのインタビューが相対的に少ないのは，調査者が20代男性という立場性をもつ者である以上に，イベントがしばしばHUBといった場所で行われていたため，デメリットを感じた女

性の参加者たちがはじめからイベントを敬遠していた可能性も考えられる．

4.2.4　女子会

以下は，Z1さんがグループZとともに立ち上げた女子会についての語りである．

Z1：この前リクエストが1000人くらいきて．なにがあったんかなって思ったらマツコ・デラックスの

**：あーやってましたね！東京の

Z1：そー！東京の方やったのに．なので，こーゆーのがあるって知ったからか，『ハーフ　女子会』で検索したんかめっちゃ申請きたのよ

Z1さんが言及しているのは，2016年12月16日に日本テレビ系列で放映された『マツコ会議』で，2000人を超える参加者が集う東京の「ハーフ」コミュニティの模様が放映された回のことである．放映後，瞬く間にZ1さんが管理するFacebook上の女子会グループに参加リクエストが殺到したという．Z1さんが「検索したんか」と言っているように，放映直後にFacebook上で検索をかけた全国の女性「ハーフ」ユーザーによって，関西で活動する「女子会」が発見されたのだろう．

Z1：ほんまは，この来てるなかの女子だけの会をしたかったんやけど．ほんとは女の子ばっかりで下ネタもやらしいこともしゃべりたいってところから始まったのに，いま変に全国区になってしまって，関西やっていうてるのに東京とかからいっぱい来て．（中略）でも，今度京都でイベントやるけど．今日も日とって予約もしてきたけど，3人くらいしか反応してくれてないねんなぁ．1000人くらいおんねんけどさ．反応してくれんのやったら入らんでいいと思う．なんか，何のために入ってんねんやろ．なんか逆に，特にトピックもあげてないねんけど，なんもあげないのもなって思って，上げてみたんよ．「女子ならではのハーフあるある」みたいなん考えて．たとえば，妙に男の子に遠慮されて逆にモテないってのが女子ハーフあるあるやと思うのね」

**：へええ

Z1：男の子ってなんか自分がいけるって思った子しかいかへんから変に遠慮されがちって，そーゆーのもあげてみたけど……もう反応せんのやったらやめてーみたいな（笑）頑張ってんねん，一応無理やり．なんか女子会って

大変やわぁ」[3)]

Z1さんの語りからは，マスメディアの影響でコミュニティの参加人数の増加がもたらされることで，結果的には管理人の努力がより求められていく事態がうかがわれる．だが，本稿でより注目したいのは，従来のコミュニティが女性の参加者にとって話題が限られる時空間であったこと，そして，そのために別様のコミュニティが組織立てられる必要が生じていたことである．この点は以下の考察でも触れたい．

5　考察

5.1 「膜」とジェンダー

さて，本稿の目的は，「ハーフ」と呼ばれる人々の日常を記述し，分析するための理論的・方法論的立場を探究する手がかりを得るべく，「ハーフ」コミュニティを成立させる機制をより多様な視点から描き出すことであった．以下では，4節の調査結果から明らかになったことを整理しつつ，ゴフマンの「膜」概念を手がかりに考察したい．

まず，グループZでは，かつての「ハーフ」コミュニティにみられた「ハーフオンリー」という成員資格は厳密に適用されてはおらず，より開放性をもつコミュニティとして組織立てられているといえる．だが，それは完全にオープンであるわけではない．なぜなら，「日本人」であれば，「ハーフ」の参加者が「紹介できる人」，すなわち「彼氏」「夫」「フィアンセ」といった親密な関係をもち「理解してくれてる人」のみが，成員として迎えられているからである．「みんなに聞きまわって『どっから来たんですかって？』聞かん」ような人物，すなわち好奇の目をもって，あれこれと詮索することでディスフォリアを成員に感受させないように振る舞えることが十分予期されるほど，成員の誰かとすでに親密な関係性を築いていることこそが，Z1さんのいう「前提」を満たしていること，すなわち，成員資格を満たしていることになる．したがって，一見するとよりオープンに思われるグループZは，成員資格を満たしている者が選抜されているという意味で，ゴフマンのいう「対等にあるものだけが社交的な集まりに招かれるというルール」が張り巡らされており，それゆえに，「膜」内の秩序は組織立てられ，ユーフォリアが保たれているといえるのだ．

次に，「膜」内の秩序が「脅威にさらされる」要因としてのナンパに着目したい．Z1さんはグループZおよび女子会を立ち上げた理由として「喫煙者」「落ち着いて食べられない」といった要因に加えてナンパを指摘していた．たしかに，「ハーフ」コミュニティのイベントとしてであっても，多くの「日本人」や「外国人」，潜在的には「ハーフ」コミュニティの成員によっても，ナンパが開始される可能性は実

際に存在しており，「膜」内のユーフォリアは常に脅威にさらされているといえる．しかも，それは女性の「ハーフ」にとって突出した「脅威」であるように思われる．

「ハーフ」が共在する出会いの場において不均衡な事態として生起する「脅威」を，どのように解釈すればよいだろうか．ここで，高橋裕子がゴフマンに依拠しつつ「行為者間で共有されている認識にそれとなく性的意味合いが込められる時，それは転調なのである」（高橋 2002: 41）との指摘を参照したい．2節で確認したように，ゴフマンのいう「転調」とは，参加者間に共有されている支配的な解釈枠組みが変転するさまを指す概念であった．本稿の事例に即して整理すれば，ナンパとは，社交空間という状況をめぐる支配的な解釈枠組みを，突如として，男女によって構成される性的な意味合いを帯びた状況へと転換させうる実践だといえる．つまり，「膜」に仕切られることで支配的たりえた解釈枠組みとそれによって保たれていたユーフォリアを一瞬であれ瓦解させてしまう行為がナンパなのである．そして，グループZおよび女子会とは，「膜」内のユーフォリアを構築・維持するために，「前提」を踏み抜かない人物のみを成員資格を満たす者として迎え入れることで，転調可能性を低減させた社交空間であるといえるだろう．「彼氏」や「夫」，はたまた「フィアンセ」といった人々が「紹介できる人」として挙げられているのは，やはりこの潜在的な「脅威」を減じるためであるようにも思われる．さらに，テレビ番組の放映後に女子会への参加希望者が多数現れたのは，より安定した「膜」によって転調可能性が減じられた社交空間や居場所を求めたゆえであるのかもしれない．

以上の事態は，江原由美子が「ジェンダー秩序」と呼ぶものが「ハーフ」コミュニティ内部においても現出した事態であるともいえるだろう．江原によれば，ジェンダー秩序とは「社会的場面を問わず使用できる，成員と活動を結び付ける一般的パターン」（江原 2001: 389）として，ジェンダー不均衡な事態を生じさせるものだという．ジェンダー秩序は「当該社会全体において一般化された」ものとして「成立」している以上，特定の状況における「個人間の社会関係にも還元できない」ものであり，「持続的な相互行為を欠いた匿名的な男女の間の社会的相互行為」においてさえ「生じうる」，ジェンダー不均衡な秩序であるという（江原 2001: 389）．

事例に議論を戻せば，まさしく，ジェンダー秩序が既存の大型「ハーフ」コミュニティにおいても生起したことへのリアクションとして，Z1はグループZおよび女子会を設立するという実践に至ったといえる．つまり，Z1およびグループZのメンバーによってなされている実践とは，不均衡な事態を生起するジェンダー秩序が持ち込まれない（持ち込まれづらい）ような「膜」をもつものとして新たな「ハーフ」コミュニティを形成することで，別様のユーフォリアを生み出す実践なのである．

5.2 「膜」と「労働」

さて，グループZにおける実践とは，既存の「ハーフ」コミュニティの対面的イベントに既存のジェンダー秩序が持ち込まれる事態に直面したために，別様のコミュニティを立ち上げ，その内部にユーフォリアを生成させるものであった．そして，その機制には，「膜」の維持にともに努める成員の選抜が密接に関わっている．以下では，グループZの「膜」とユーフォリアをめぐる実践を「労働」という視点から捉え返してみたい．

まず，Z1さんの「姉御肌」や「頑張ってんねん，一応無理やり」という示唆的な語りを手がかりとしたい．上記の語りは，コミュニティのユーザーが快適に過ごせるよう腐心する管理人の語りであるとともに，「労働」における疲弊や疎外の語りとしても捉えられるものと考えられる．だが，果たしてストレートに「労働」とその搾取について述べた語りとしてのみ，Z1さんの語りを捉えてもよいのだろうか．

ところで，クレーリーをはじめとして，「労働」を搾取ないし疎外という観点から捉える議論では，いずれもK. マルクスによる労働概念が参照される．マルクスは資本主義によって生み出された疎外された労働への徹底的な批判を行ったことで知られる．だが，マルクスは，労働それ自体を批判していたわけではない．彼はあくまでも，労働を人間の生命活動に必然的に伴う精神的・肉体的活動として捉えていたはずである．

> 労働は，まず，第一に，人間と自然とのあいだの一過程，すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し，規制し，管理する一過程である．人間は自然素材をそのものに1つの自然力として相対する．彼は，自然素材を自分自身の生活のために使用しうる形態で取得するために，自分の肉体に属している自然諸力，腕や足，頭や手を運動させる．人間は，この運動によって，自分の外部の自然に働きかけて，それを変化させることにより，同時に自分自身の自然を変化させる……（中略）……彼は自然的なものの形態変化を生じさせるだけではない．同時に，彼は自然的なもののうちに，彼の目的――彼が知っており，彼の行動の仕方を法則として規定し，彼が自分の意志をそれに従属させなければならない彼の目的――を実現する．（Marx 1867=1997: 304）

つまり，マルクスにとって労働とは，人間が自然に働きかけることで，自らの生をより良いものへと変容させる活動だといえる．マルクスのいう自然と社会という概念を対立させて捉えるべきではないとするJ. W. ムーアによる指摘を敷衍させれば（Moore 2017=2017），労働であれ，本稿が照準する「労働」であれ，それは「自

分自身の生活のため」に社会に働きかける能動的な活動だといえる．この意味合いにおいて，グループZにおける実践とは，単なる成員の選抜というよりも，ともに「労働」する，いわば「協働」するための「労働者」の集まりを形成するものだともいえるのではないだろうか.

たしかに「労働」には搾取的な機制が含まれており，それを疎外状況と呼んでもよいのかもしれない．だが，先行研究で指摘されてきたように，「ハーフ」が生きる日常にはすでに現に問題状況が生じている以上，その「労働」が彼ら・彼女らの生活をしのげるものに変えていく能動性を，搾取や疎外といった言葉で過剰に切り詰めてしまってはならないように思われる.

だが，あらゆる「労働」と「膜」をめぐる実践を「肯定的なもの」として称揚するだけにとどまってはならない．既存のコミュニティにおけるジェンダー秩序へのリアクションとして，グループZと女子会が形成されたように，「膜」をめぐる「労働」のさなかに，ときに抑圧的な社会的諸力が生起することがありえるからである．それゆえに，現代日本社会を生きる「ハーフ」と名指された人々のリアリティに迫るためには，「労働」と調査者自身も巻き込まれうるジェンダー秩序の様態に着目しながら，より立体的に「ハーフ」の日常のドラマトゥルギーに迫る必要がある.

6　今後の展望

本稿は，E. ゴフマンのドラマトゥルギー理論を手がかりにすることで，「ハーフ」と呼ばれる人々の日常を記述し，分析するための理論的・方法論的立場を探究することが目的であった．具体的な事例の検討から，その道筋を描くための手がかりを示唆することはできたように思われる．以下では，本稿で十分に扱えなかった課題に触れることで，今後の展望を示したい.

まず，「もう越えた」というZ1さんの語りから示唆される，「ハーフ」の技芸についての考察を進めることが課題である．グループZにおいては，「協働」できる成員を首尾よく選抜し，居心地の良さを創出・維持する仕組みがすでにあるからこそ，笑いによって共同性を生み出す話法をあえて駆使する必要がないために，「もう越えた」という語りが生まれたのかもしれない．「ハーフ」コミュニティの「膜」の内側とその外に広がる日常の問題状況の分析や，ほかのコミュニティとの比較など，さらなる経験的な調査の蓄積によって，話法を含めた「ハーフ」の技芸により一層迫る必要がある．次に，本稿では「ハーフ」コミュニティにおけるジェンダー秩序の生起について論じたが，多様であるはずのジェンダーおよびセクシュアリティをめぐる実践の様態に十分には迫れていない．今後は，ジェンダー，セクシュアリティ，人種，エスニシティ，ネイション，階級あるいは階層，宗教などが関わる構造的力関係や単数形ではありえないアイデンティティが複雑に絡まりあって作用する

さまに照準する交差（intersectionality）概念に依拠しつつ（河合編 2016），より多面的かつ包括的に「ハーフ」が問題状況と折衝しながら繰り広げるドラマトゥルギーの具体的様態に迫りたい.

［注］

1) 「ハーフ」とは，ひとまず「表現型（phenotype）による分類を通して人種化された集団を指し，歴史的に構築されてきた『日本人』と『異民族』『異人種』あるいは，『外国人』とみなされる人たちとの間の『人種混淆』に関する言説カテゴリー」と定義される（岩渕編 2014: 13）．差別的な含意をもつ「ハーフ」という呼称の問題性については歴史的な変遷もふまえて議論がなされているが（川島・竹沢編 2016），本稿では，①調査協力者によって実際に用いられている，②一般的に認知された支配的な呼称である，③代替的な呼称も問題含みであるという理由から，括弧付きで「ハーフ」と表記することで呼称の問題性を示しながら用いる.

2) グループ Z にも喫煙者はいる．だが，彼らは喫煙する際に，ほかの参加者に煙があたらないように換気扇に最も近い席に率先して移動し，席順を調整し，頭上や人のいない方向へ常に煙を吐き出すなどの配慮を欠かさない（2017 年 6 月 16 日，同年 12 月 16 日，2018 年 1 月 20 日のイベントにて）.

3) 後日，Z1 さんから「女子会 1000 人も来てへんかったわ．でもマツコの番組で 100 人ぐらい来た！だから今トータルまだ 140 人ぐらい（笑）」「偽造になるとこやったね（笑）」と Facebook メッセンジャーを介して発言を訂正するコメントを頂いた（2018 年 2 月 19 日）．1000 人という言葉には，「この来てるなかの女子だけの会」，つまり見知った関係性のなかで立ち上げた女子会に，突然多数の申請がきたことへの驚きや戸惑いなどの実感が込められていたと思われる.

［文献］

Boyd, Danah, 2014, *It's Complicated*, New York Acting in Association with Curtis Brown Group Ltd: London.（＝2014，野中モモ訳，『つながりっぱなしの日常を生きる――ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』草思社.）

Crary, Jonathan, 2013, *24/7: Late Capitalism and the Ends of Sleep*, Verso.（＝2015，岡田温司監訳／石谷治寛訳『24／7――眠らない社会』NTT 出版.）

江原由美子，2001，『ジェンダー秩序』勁草書房.

Evanoff, Elia, 2010, *Online Hafu Japanese Communities: The Uses of Social Netlaboring Services and Their Impact on Identity Formation*, PhD Thesis, London School of Economics and Political Science.

藤田結子，2012，「『新二世』 のトランスナショナル・アイデンティティとメディアの役割――米国・英国在住の若者の調査から」『アジア太平洋研究』37: 17-30.

Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday＆Company Inc.（＝1974，石黒毅訳『行為と演技――日常生活における自己呈示』誠信書房.）

―――, 1961, *Encouters: Two Studies in the Sociology of Interaction,* The Bobbs-Merrill Company, Inc.（＝1985，佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い――相互行為の社会学』誠信書房.）

―――, 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press.

堀口佐知子・井本由紀，2014，「ミックス・レースはどう語られてきたか――『ハーフ』にいたるまでの言説をたどって」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，55-77.

岩渕功一編，2014，『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.

川端浩平，2014，「〈ダブル〉がイシュー化する境界線――異なるルーツが交錯する在日コリアンの語りから」『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，222-42.
河合優子編，2016，『交錯する多文化社会――異文化コミュニケーションを捉え直す』ナカニシヤ出版.
川島浩平・竹沢泰子編，2016，『人種神話を解体する 3――「血」の政治学を越えて』東京大学出版会.
ケイン樹里安，2017，「ハーフの技芸と社会的身体――SNS を介した『出会い』の場を事例に」『年報カルチュラル・スタティーズ』5: 163-84.
Marx, Karl, 1867, *Das Kapital: Kritik der Politisehen Oekonomie*, Hamburg: Verlag von Otto Meissner.（＝1997，資本論翻訳員会訳『資本論』第一巻 a，新日本出版社.）
Moore, W, Jason, 2017, “Metabolic rift or metabolic shift? dialectics, nature, and the world-historical method”, *Theory and Society*, Springer.（＝2017，斎藤幸平訳「物質代謝の亀裂か，それとも変化か？――弁証法，自然，世界史的方法」『現代思想』45(11): 148-75.）
大山真司，2015，「ニューカルチュラルスタディーズ 4――デジタル文化の価値創造」『5: Designing Media Ecology』4: 92-9.
高美帑，2014，「戦後日本映画における〈混血児〉〈ハーフ〉表象の系譜」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，80-113.
須本エドワード豊，2010，「ミックスルーツ――ネットと SNS が築いた絆」松浦さと子・川島隆編『コミュニティメディアの未来――新しい声を伝える経路』晃洋書房，227-39.
田口ローレンス吉孝，2017，「戦後日本社会の『混血』『ハーフ』をめぐる言説編成と社会的帰結――人種編成論と節合概念の批判的援用」『社会学評論』68(2): 213-28.
高橋裕子，2002，『女らしさの社会学――ゴフマンの視角を通して』学文社.
山北輝裕，2011，『はじめての参与観察――現場と私をつなぐ社会学』ナカニシヤ出版.
山本敦久，2014，「〈ハーフ〉の身体表象における男性性と人種化のポリティクス」『〈ハーフ〉とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社，114-42.

大阪市立大学文学研究科　後期博士課程　人間行動学専攻社会学専修
けいん じゅりあん
julian0325dr.j@gmail.com

Toward a Dramaturgy of the "Hāfu": Social Media, Gender Order, and Labor.

KEANE, Julian

Julian0325dr.j@gmail.com

How can we analyze the everyday lives of the mixed-race people known as "Hāfu," who at times encounter problematic situations in contemporary Japanese society? In order to answer this question, this article draws on Erving Goffman's theory of dramaturgy to argue that it is necessary to describe the everyday lives of "Hāfu" in specific terms. It considers two main components of their lives: social media, involving both in-person and remote interactions; gender order; and the critical perspective that various practices carried out through social media are a form of labor. The aim of the paper is to delineate a path toward more meaningful research outcomes, by examining problems related to these two components.

Keywords : Hāfu, Dramatulgy, Social Media, Labor, Gender Order